

聖書：ルカの福音書 12 章 35～48 節

説教：あかりをともしいなさい

## 1 思いがけないときに帰ってくる主人

今日からしばらくルカの福音書を見ていきます。

皆さんはどんなところに心が留まったでしょうか。47 節。「主人の心を知りながら、その思い通りに用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。」ここを読んで、急に不安になったかもしれません。

説明するまでもなく、このたとえ話に出て来る主人は神を現しています。主人の帰りを待つしもべとは、私たちのことです。神が来られるときまできちんと目を覚まして、すべき事をきちんとしていなさい。そうでないとひどい目に遭いますよ。そんな脅し文句に感じて恐くなります。

日曜日の礼拝に出ている間はなんとなく神のことを考える。けれどもそれ以外の時は、すっかり神は忘れてる。そんな一週間を過ごしています。目をさます努力をしなさいと言われても気が進みません。そもそも楽しいことならなんでもやるけれど、苦しいことなどやりたくない。それが私たちの本音です。

主は、どんな思いを込めてこのたとえ話を語ったのか。細かく見ていきます。

## 2 不忠実な者ども

### 1) 「主人の帰りはまだだ」

このたとえ話を読むと、私が小学校 3, 4 年生の頃のある小さな出来事を思い出します。数人の仲間と教室の外にある花壇や物置を掃除をしていました。自分なりに掃除をし

たつもりで、それでも時間が余ったので友だちとふざけたり遊んでいました。そこへ思いがけなく校長先生が現れ、「きちんとやるべきことをしなさい」とお小言を頂戴してしまいました。あのとき、ひどく間の悪い思いをしたことをいまでも忘れません。

たとえ人に見られていなくても、24 時間緊張しながら忠実に義務を果たす。もしそうなら、クリスチャンはなんと疲れることかと気持ちが暗くなります。

### 2) 主人が給仕をする！

とは言え、このたとえ話にはこんな場面も出て来ます。37 節。「帰ってきた主人に、目をさましているところを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうか帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてください。」

しもべが主人の帰りを待つのは当然の義務です。ですから、主人が帰ってきたときに目を覚ましていたからと言って、主人がしもべをほめることは普通ありません。まして、主人が給仕となってもしもべのために食事の世話をするなど考えられません。ところが忠実なしもべに対して、神はこんなことをしてくださると言うのです。

神が、食卓の世話をしてくれる。それはいったいどういうことなのか。ここからだけではまだ具体的に見えてきません。

3) 打ちたたたく、食べる、飲む、酒に酔う

そのことを考えるヒントが45、46節に出て来ます。「ところが、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ』と心の中で思い、下男や下女を打ちたたき、食べたり、飲んだり、酒に酔ったりし始めると、しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰ってきます。そして、彼を厳しく罰して、不忠実な者どもと同じ目に合わせるに違いありません。」

主人がいないことを良いことに、しもべは台所でどんちゃん騒ぎを始めてしまいます。これを見つけた主人は、当然しもべをきびしく罰します。どこかにありそうな話ですから、すぐに納得してそれ以上深く考えないかもしれない。

でも、よく見るとここに不思議なことばがあります。打ちたたたく。食べる。飲む。酒に酔う。このことばに注目します。これはすべてしもべがやったことです。でも、見方を変えて、これを主人の立場から言い直したらどうなるでしょう。主人は打ちたたかれた。主人は食べられた。主人は飲まれた。酒に酔うは、そのままでは言い直すのが難しいので、「主人は、みなのお楽しみになった。からかわれた」と言い直してみましょう。

どうでしょうか。なにかを思い出しませんか。そうです。主イエスが味わわれた苦しみと関係しています。十字架にかかる前に、この方は打ちたたかれました。主のみからだは十字架で裂かれ、聖餐式でおなじみとおりに、その御からだを分け与えて、食べるようにとされました。流された血潮は、これを飲むようにと言われました。主が十字架で苦しんでいたとき、周りにいた者たちは、主をあざ笑ひ、楽しみ、まるで酒に酔っているかのよう

な大騒ぎでした。

37節の不思議なみことば、「主人のほうか帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をします。」これは、主が備えてくださった食卓、すなわち聖餐のことを指し示しています。最初は、常識に反するような奇妙な話に見えたのですが、こんな風に結びつけて考えると、主はこのとおりのことをしてくださっていたのだと納得がいきます。

### 3 あかりをともしないさい

#### (1) 努力目標なのか

さて、ここまで主が語ってくださったたとえ話の解き明かしをしました。それでも心に引っかかりは解消されません。35節で「腰に帯を締め、あかりをともしないさい」と言われました。努力してみたけれどできないという方はどうしたら良いのでしょうか。いや、努力するのも嫌いという方はどうなるのか。

例えばこういうことでしょうか。一ヶ月間きちんとしもべとしてのつとめを果たした人は聖餐式に与ることができる。でも、そうでなかった人は、聖餐式を遠慮してください。ご存じのとおり、そんな差別はありません。どんな者であっても、主こそ私の救い主と告白し、洗礼を受けた者は無条件で聖餐に招かれています。

ではここにあるのは単なるたとえ話で、現実とはほとんど関係ない。単なる理想論を語っているだけ。いいえ、決してそんなことはありません。現実にはほとんどありえない空想話ではありません。事実をそのまま語っています。

#### (2) 主はいつ来られるのか

この話が事実だというのなら、どんなふう  
に考えたら辻褄が合っていくのでしょうか。考  
える糸口がひとつあります。主人はいつ戻っ  
てくるのか。神はいつ私たちのところに来ら  
れるのか。そのことをきちんととらえていく  
と、このたとえ話で主が何を語ろうとしてい  
たのか、焦点がぴったりと合うように見えて  
くるはずです。

主はいつ来られるのか。少し知識のある方  
はこう答えるでしょう。「主は世をさばくた  
めに再び来られます。それがいつであるかは  
だれにも知らされていません。」確かにその  
とおりです。だから主の再臨の時まで、私た  
ちは目を覚ましてしもべのつとめを果たし  
ながら主を待たなければならない。でもそれ  
だけでしょいか。

実に単純なことですが、主は二千年前に来  
てくださいました。このたとえ話は、人々の  
所へ来られたイエスのことと、やがて再臨さ  
れる主の二つのことを同時に語っていると  
考えるべきでしょう。

ユダヤ人は、旧約聖書を通して救い主がや  
がてイスラエルに遣わされてくるというこ  
とを教えられています。主人の帰りを待つし  
もべのようにして何百年も待ち続けてきま  
した。その救い主が、人となって来てくださ  
いました。そのとき、この方こそ自分たちが  
帰りを待っていた主人、救い主であると気が  
ついた者はどれだけいましたか。ほとんどい  
ない。およそ三年間イエスに付き従い、寝食  
をともにしていた弟子たちでさえ気がつか  
ない。たとえ話の言い方を借りれば、腰を帯  
を締め、あかりをともし、目をさましていた  
者はごく少数の例外を除いてほとんどいま  
せん。

ということは、主の食卓に招かれる者はほ

とんどいなかったはずですが、実際は違いま  
した。救い主だとわからない、いわば眠りこ  
けていた弟子たちがまず最初に主の聖餐に  
招かれました。たとえ話で言っている事と矛  
盾するように見えませんか。

矛盾は一つもありません。「あかりをと  
もしていなさい。」「目をさましていなさい。」  
どれも、私たちがクリスチャンとしてやらな  
ければならない義務として最初とらえよう  
としましたが、そもそもそれが間違っていた  
のです。

### (3) 私たちの目をさましてくださいる方

眠りこけている弟子たちの目をさまさせ  
たのはだれですか。弟子たちが努力して目を  
さましたのですか。とんでもない。主が目を  
さましてくださいました。どうやって目をさ  
まさせましたか。主が十字架におかかりに  
なったとき、弟子は何をしましたか。ペテロ  
を先頭にして主を捨てて逃げてしまいました  
。主のためにはいのちも捨てますと言った  
のに、いざとなれば一目散に逃げたのです。

しかし、主は死からよみがえられました。  
その時初めて弟子たちの目が開かれます。自  
分があかりをともしすのだとがんばってきた  
けれど、そもそも自分でがんばってできる事  
などたかがしれている。いざとなれば主を捨  
てるような事しかできない。やってくださ  
るのは主です。主があかりをともしてください  
る。そのために、主がからだを裂いて与えてく  
ださり、血を流してくださいって、それを飲むよ  
うにと言ってくださいる。救い主はそこまでし  
てくださったのです。

それだけではない。44 節にこうあります。  
「わたしは真実をあなたがたに告げます。主  
人は彼に自分の全財産を任せるようになり

ます。」これはだれのことか。弟子たちのことですか。かつて眠っていたような弟子たちなのに、あなたがたは忠実な賢い管理人なのだから、言ってください。驚きます。

主の救いをいただいても、なお自分の中にある罪に苦しむことがあります。信じていても、からだが弱っていくことを悲しみます。永遠のいのちを信じていても、愛する者を失う悲しみは癒えることはありません。そのとき思われます。主が再び来てくださるとき、私の苦しみは喜びに変えられる。だから主よ、来てください。そう祈られます。それは努力でも何でもありません。苦しみに会うときだれもが心から願うことです。

そのとき、主は言ってくださいます。あなたはあかりをともしている。あなたは目をさましています。あなたは忠実な賢い管理人だ、とさえ主は言ってくださいます。

そのようにしてくださる主とともに待ち望んでいきます。